

第1回働き方改革推進会議の概要について

- 1 日時： 平成29年5月29日（月）15:15～17:15
- 2 場所： 滋賀県庁北新館5-A. 会議室

3 出席者

① 委員

上原重治（高島市教育委員会教育長）、大野裕己（滋賀大学教職大学院教授）、川端 一（草津市立老上小校長）、高力雅広（滋賀県立高等学校PTA連合会副会長）、駒井朔男（野洲市社会教育委員、野洲市体育協会理事長）、澤由紀子（滋賀県立草津高等学校長）、重森恵津子（滋賀県立野洲養護学校長）、西村文一（甲賀市立水口中学校長）、平尾香子（滋賀ダイハツ販売株式会社取締役、管理本部長、人事課マネージャー）、山本身江子（日野町社会教育委員、日野町地域女性団体連合会会長）

② 滋賀県教育委員会事務局

教育長、教育次長（管理）、教育次長（指導）、教育委員会事務局課室長

4 議事概要

議題：学校現場の多忙化の現状と課題について

- 小学生は朝8時前後に登校するので、多くの教員はそれまでに出勤をしている。子どもがいる間、担任は教室から離れることができなくなる。休憩を取ることもできずに子どもたちと向き合っている。
- 中学校では地域によって異なるが、ほぼ毎日7時半から始業前まで部活動の朝練習をしている学校が多い。生徒の下校時刻は日没時刻によって変わるが、本校では部活動終了後18時に生徒が下校してから、必要に応じて各教員が家庭連絡、家庭訪問などを行い、次の日の授業準備や学級経営の仕事に取りかかるのはそれ以降になる。したがって休日の部活動指導を含めるとかなりの超過勤務時間となっている教員が多い。部活動は中学校では基本的に全員顧問制だが、時間的・精神的に大きな負担と感じている教員がいる一方、やりがいを持って意欲的に取り組んでいる教員も少なからずいる。
- 中学校では担当授業がない空き時間があるが、その時間に、教室に入れず別室で学習する生徒、授業を抜け出そうとする生徒、心の悩みを訴えに来る生徒などへの対応が必要なことが多く、空き時間に教材研究やテストの採点などできない状況にある。いつも縦横無尽に対応をしなければならず、常に物事に追われているような多忙感がある。
- 現場においても周りの理解で働きやすいかが変わってくる。先生たちが横

のつながりでコミュニケーションを取れる場や機会があるといい。

- 家庭での親子のしつけやコミュニケーション作りが子どもたちの人間関係づくりのもととなる。
- 家庭環境が変わってきて、学校に期待することが大きくなっている。サービスを受ける感覚でいる親もいると聞いている。
- 誰かが号令をかけてでも仕事は区切らないといけない。体調が悪いと万全な対応ができない。当社では声かけをして忙しい人を手伝う取組をしている。環境を変えたり声かけをすることは大切だ。
- 学校と地域のコミュニケーションを密接にすることで解決できる課題がたくさんある。地域の人が学校に苦情を言うのではなく、子どもに声掛けを行えば先生の負担も減る。
- 教員は責任感が強く、仮に10ある仕事を8に減らしたとしても、自分で2を作ってしまう。子どものために自分で仕事を作ってしまう教員の特性がある。一般に言われるサービスでは失敗が許されないが、教育もサービスであると捉える保護者も多いため、失敗にならないように細かい部分まで時間をかけなければならず、負担やプレッシャーは大きい。
- 学校に来るまでの教育、学校における教育、学校外の教育がある。この3つは不可分ではないが、それらの主体が学校に寄りかかっているのが現状である。3つの教育のそれぞれの主体の協働のなかで、現在学校が担っている部分は担っていくことが必要だ。
教員は時間で働き方を考えてこなかった職種である。改めてワークライフバランスを意識しながら仕事をする必要がある。
- 働き方改革の取組はいくつかのステップを踏む必要がある。保護者の理解を得て、地域の人が納得して学校経営を支えるという構造になれば、先生が価値ある仕事ができるということになる。
- 最初のステップは、教員の物理的な部分も含めて重たい課題になっている部分を除去して先生に価値ある仕事をしてもらえるよう、職場環境を整備することや、教員自身の意識変革を図る必要がある。
そのうえで、「組織としての課題解決」や「地域での協働」という課題解決につながっていく、それが最終的なゴールになると思う。